
魔法先生ネギま！～狐と兄の燈し語・改～

皐月二八

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜狐と兄の燈し語・改〜

【Nコード】

N0011Y

【作者名】

皐月二八

【あらすじ】

神となった元人間、夜白 刹那と天狐の輪廻、麒麟の煌月、娘達に半神人と化した桜咲 刹那や龍宮 真名たちが管理している“世界”のある空間。輪廻と娘達は、刹那に与えられた（押しつけられた）新たな仕事に激怒し、家族を連れて新設“世界”に降り立った。とある一家+αがおくる、何の望みも無い物語、のたのたと始動！

1 輪廻side 始まりは彼女の主張から（前書き）

！注意！

本作は『魔法先生ネギま！』狐と兄の燈し語』の再編集版ですが、全くの別物だとお考えください。共通点は一部のキャラと設定くらいです。

本作では輪廻たちが国をつくります。

1 輪廻side 始まりは彼女の主張から

人間という生き物は、まあ、神とか妖怪とか神獣とかの大部分もだけれど、兎に角視覚からの情報に頼る傾向がある。認識も主観も客観も思考も存在も純愛も殺意も無関心も、その構成に大きくウェイトを占めるのは視覚情報だ。

故に、視覚情報は脳に重大な楔を打ち込む。愛憎喜怒哀楽、様々な感情を呼び起こさせる。そして打ち込まれた楔は、そう容易く消えやしない。視覚を通して脳に刻み込まれたかのように。それは、消えない。

消させはしない。それが、忘れたくないものだとしたら余計にそう思うだろう。忘れないということは、その視覚情報が生涯影響を及ぼし続けるということだ。つまり、残り続けるのだ。

行動に、思考に、感覚に、価値観に、倫理に、未来に、現在に、影響を与えていく。壊して、包み込んで、再構築して、繋ぎ止める。

……まあ、長ったらしく説明しだして、結局何が言いたいのかというところ。

お兄ちゃん、愛してる。

その髪も、瞳の色も、顔も、容姿も、視覚に入ってくる全ての情報は勿論、視覚に入らないもの、他の五感で感じ取れるもの、感じ取れないもの、全てを愛してる。

長所も短所も愛してる。「優しい」だとか「カッコいい」とか、そんな長所……相手の一部しか愛せないような愛を、私は愛とは認めない。

顔が良い人が好み？ だったら自分好みの顔を絵で描くなり何なりして、一生眺めていれば良い。

頭が良い人が好み？ 頭の良さの基準なんて、周囲の環境や時代の趨勢で幾らでも変化を遂げてきた。

心優しい人が好み？ その優しさが自分に向けられるだけのモノだとしたら、そんなもの、誘蛾灯に誘われる蛾のようなものだ。

力が強い人が好み？ それでは強い雄オスに惹かれ、より優秀な種を残そうと本能という鎖にがんじがらめにされた獣ケダモノと何ら変わりがない。雌メスでは無い、女オンナはもっと理性を持たねば。

そんな不完全な愛と、私の愛は全く違う。

私を指して“ブラコン”と呼ぶ者もいる。確かに、私はお兄ちゃんの妹だ。

勿論、神になった人間に天狐の実妹がいるわけもなく、あくまで義理の妹ということになるが。

お兄ちゃんのことだけを年がら年中考えている私は、確かにブラコンではある。否定はしない。

でも、私の愛は完全にして本物。そうでなくてはいけない。

お兄ちゃんだけの天狐として、女として、雌として、奴隸として、手足として、お兄ちゃんへの愛は、常にこの身に溢れさせていなければならぬ。

無論、そんな事を考えるまでもなく、お兄ちゃんへの愛はいつぱいだ。

お兄ちゃん以外、何の興味も見いだせなくなるくらい。お兄ちゃんのためなら、“世界”全てを殺し、創造神^{幼女}を跪かs……あいつはウザいから殺すか。

まあ、それくらい片手を振ればできることだし、大して大事でもないから、比喻としては不適切だろう。

兎に角、何でもできるくらいお兄ちゃんが好きだ。

お兄ちゃんが望めば、何だってしてみせる。

お兄ちゃんが望まないモノは、全てを壊しつくしてみせる。

……おっと、お兄ちゃんのこととは極の言葉をもってしても、永劫の時をかけたとしても言い尽せない。

そろそろ一旦終えて、自己紹介でもしようと思う。

夜白^{やしろ} 輪廻^{りんね}。

そう名付けられ、そう名乗っている“天狐^{てんこ}”。それが、私だった。

愛しいお兄ちゃん……夜白^{やしろ} 刹那^{せつな}は、私を指して良く言う。

「黒くて白い」と。

闇を芯まで吸い込んだような漆黒の長髪。何処までも磨く抜いたような純白の肌。

身に纏っているのは漆黒のドレス。大きく空いた胸元や、ドレスから伸びた手足は純白。

お兄ちゃんと私にしか見えない、髪の間から顔を出している狐の耳……そしてお尻のあたりから生えている伸縮自在・変幻自在の九

本の尻尾は、髪に負けなくらい漆黒に染まっている。
コントラスト。

お兄ちゃんの好きな色。
だから、私も大好きだ。

唯一、瞳だけは右目が紅、左目が翡翠色だけど、此れは此れでお兄ちゃんへのアピールポイントとなる。

一六〇くらいの小柄、細身でもお兄ちゃんを快楽に誘う豊満な胸とくびれた腰、大きい尻に蠱惑的なシルエットの太股、スラリと伸びた足。

何れも、あらゆる異性を魅了する天狐キツネの魅惑チャームとフェロモンに満ち満ちている。

もつとも、お兄ちゃん以外の異性を誘惑する気など全くないけど。

……と、まあ、自画自賛（一〇〇パーセント真実だが）が一段落ついたところで、そろそろ現実にも目を向けようかと思う。

「聞いているのですか？　輪廻さん！」

“娘達”^{ドーターズ}。そう呼ばれる二八人の女がいる。

お兄ちゃんが、担当する“世界”管理用に創造した神工生命体で、何の束縛も制限もない特殊な存在。

その長女、つまりリーダーが、今、私の執務机を容赦なく叩いている夜白やしろ硯璃すずりだ。

制服ではなく、私服……彼女の場合は藍色の振袖を着込んだ、純白の長髪と瑠璃色ラピスラズリの瞳が特徴のこの少女は、私より一〇センチくらい背が高いモノだから、しかも私が座っているのに対して硯璃の方は立っているのだから、私を見下ろす形で仁王立ちしている。

そして、私と同等かそれ以上に大きい胸が、彼女の怒りを体現しているかのように震えていた。今にも着物から飛び出してきそうだが、同性愛レズの趣味がない私には何の魅力も感じない。

“娘達”ドーターズは基本的に、性格は私か煌月こうつき（私と同じく、お兄ちゃんに絶対の忠誠と愛を誓っている“麒麟”キリン）がベースになっている。此れは、お兄ちゃんが私たちの人格をベースにした方が、創造しやすかったからだ。

そんなこともあって、そしてお兄ちゃんの愛情たっぷり子育ての結果もあって、“娘達”ドーターズの面々は程度の差こそあれ、全員がファザコンになっている。

普段は妹に対して高圧的で、自分こそがお兄ちゃんに最も愛された存在と公言して憚らないこの超弩級にムツカツクエセ似非大和撫子が怒る理由は一つしかない。

すなわち、お兄ちゃん絡みだと相場は決まっている。

ていうか、私は既に知っている。

それこそ、溜息を吐きたいぐらいに。

「創造神アリスの奴……御父様を、動かしやすい動かしやすい下働きか何かと勘違いしているのではありませんか……!!?」

何たる屈辱!! 何たる侮辱!! 何たる傲慢!! 御父様は、私わたくしの偉大な偉大な御父様は創造神アリス如きに如何こうできる程、低俗な低

俗な存在ではありませんのに……巫山戯てますわ!!」
フザケ

怒り心頭ここに極まり。

純白の肌を茹でダコのようにし、ぶるぶると震えている硯璃が机を叩くたび、この“世界”が消滅する程の神力が放たれる。まあ、結界を張って防いでいるけど。

幾ら片手間程度で張れるチャチな結界と雖も、こんな小娘に壊されるほど、ヤワな結界など張らない。

そんなことよりも、だ。

ああ、確かに私も怒っている。
でも、まあ、あれだ。

怒っているときに自分以上に激怒している人間を見ると、かえって怒りが冷めるヤツ。

そんな感じで、私の怒りは創造神あのゴミを数京回甚振りいたぶ廻る程度で済ませれば落ち着く程度の怒りまで鎮静化していた。

それでもあまりの怒りに、口から出た吐息がそのまま“狐火”きつねびとなつてでてきそうだが、まだまだ自制が効くレヴェルだ。

神というのは、幾つもある“世界”を担当している。といっても、地球なら地球で系統シリーズがあり、其れを数人の上級神、そしてその下の中級神と下級神が管理している。

一方で、人間から神になったという前代未聞の前歴を持つお兄ちゃんの場合、私たちだけで独自に担当させられている。

お兄ちゃんは創造神の支配下には無いので聞く必要はないのだが、人が良いお兄ちゃんはあると受け入れてしまった。全く、お兄ちゃんの優しさを利用した神共が憎くてたまらない。

その数は、あくまで身内だけという理由で現在二つ。かなり少ないが、精々が三五、六人程度の夜白家^{わたしたち}+αで管理していることを考えると、寧ろ多い位だったりする。

お兄ちゃんを過労死させたいのか、と言いたいところだが、当のお兄ちゃんが不平不満の一つも言わないので仕方がない。

その上で、だ。

地球系統の新設“世界”をお兄ちゃんに頼みたいと、創造神アリス^{ヴェロキウス・スタニア}ⅤⅡRⅡスウォルディナから通達があったのだ。

それに、私たちは激怒した。

お兄ちゃんを愛する者として、お兄ちゃんの意のままに動く奴隷として、お兄ちゃんの過労を増やすような真似を容認できるわけがない。

キレルぞ。

そう言って叫び、暴れられればどれだけ良いか。

でも、お兄ちゃんは苦笑しながら二つ返事で了承してしまった。

……こうなったら、もう何も言えないじゃないか。

「一体どうしたらいいのでしょうか……全く、厄介な厄介な……いえ、御父様に仕事をさせなければ、全部済むのですが……いつそのこと、私が直接^{わたくし}……」

「……そうだ」

「はい？」

顎に手をあて、部屋の中を動き回っていた硯璃は素っ頓狂な声をあげ、私を見つめた。

「……輪廻さん？ まさか……」

「私が行く」

そう、私が直接行けばよいのだ。そして、その“世界”を管理しつつ、暇を見つけてはお兄ちゃんに報告がてら逢いに行く。

お兄ちゃんから一秒でも離れるのは辛いが、お兄ちゃんの過労を抑えるためなら、何てことはない。

……そうだ。

「硯璃……今、すぐに動ける娘達^{手駒}は？」

「愚妹共ですか？ 今は両^{そらい}“世界”は現世・冥界ともに安定期に入っていますから、穹斐^{そらい}・骸亜^{がいあ}以下……半分くらいは動かせますが……何か？」

「簡単な話よ。……貴女たちも来なさい」

「え？」

「私と娘達^{あなたたち}だけで“世界”の管理ができるかどうか……そのテストケースだとお兄ちゃんには上申しておくわ。そうすれば、その“世界”は基本的に私たちの思うまま……」

其処まで言って、私はニヤリと笑った。お兄ちゃんには、絶対に見せない類の笑いだ。

向こうも察してくれたのか、私と同じような顔になってきている。

「硯璃……お兄ちゃんを“神”とする国、創ってみたくない？」

「みたいですわ、輪廻さん!!」

顔を輝かせ、御淑やかな振る舞いなど完全に吹き飛んだ大和撫子（笑）は、大声をあげて拳を握った。

「何時も、何時も思っていたのです……此の“世界”の人間どもは、全知全能の、究極にして至高の、神聖にして絶対なる御父様に感謝の一つも述べやしません!! 何度、何度消してやろうかと、^{ヒザマズ}跪かせてやろうかと思ったことでしょうか……。

御父様は其れを望んでいなかったから、ずっと我慢してきましたわ!! ですけど、管理権が輪廻さんや私に移れば……」

「ええ、ある程度の干渉は許されるわ」

やりすぎても問題ない。どうせ、この仕事を押し付けて来たのは創^{幼女}

造神共だ。

その“世界”に、お兄ちゃんを神とする国を創るくらい、文句は言わせない。

言ったところで、振じ伏せるだけだ。

鼻唄を歌いそうになるのを我慢しながら、私は席を立て歩き出した。

1 輪廻side 始まりは彼女の主張から（後書き）

次回は刹那sideです。

御意見御感想宜しくお願いします。

2 刹那side 麒麟と妹の願いは（前書き）

本作は基本的に、色々な人の視点で書いてみようかと思っています。

やはり改訂前の輪廻視点＋第三者視点だけは、些か無理がありましたので。

タイトルの○○sideの○○の人物の視点で、物語が進んでいきます。

2 刹那 side 麒麟と妹の願いは

“空間”という、直球というか味気ないというか、兎に角そんな名で呼ばれている空間。

其処には様々な施設があるが、“世界”を管理するための部屋が多い。

もともと、俺——夜白やしろ 刹那せつなの場合は、輪廻や煌月、そして補佐に回ってくれているサクや真名・娘達が大部分を片付けてしまうから、寧ろ驚くくらい仕事がなかったりする。

此処まで仕事を取られてしまうとかえって面目が無い……と言いたところなのだが、全員好意でやってくれているのだから、それを無下にするわけにもいかない。

気をかけられすぎるのも、困りモノだぜ？

そんなこんなで、俺の執務室は大して多くない書類と、執務しているのかも妖しい男と、俺の脇で控えている美女だけ——という、はたして執務室と言えるのだろうか些か微妙な状態なのだ。

夜白やしろ 煌月こうつき。神界では、天狐の次に能力が高いとされる準最高位神獣“麒麟キリン”。

ある日、墜ちてきたところを看病したら妙に恩義を感じてくれたらしく、以来、ずっと俺に仕えてくれている。

身長一八〇センチ以上の長身に、セミロングの透き通るような白に近い水色のストレートヘア。何を考えているのか、俺と輪廻くらいしかわからない水色の瞳。

常に無表情で、変化に乏しい。俺ですら、彼女の表情を見分けるのは至難の業だ。

其れを差し引いても、絶世の美女だと言えるだろう。

彼女は大抵、何故か男物の執事服を着ている。夜白家の中でも断トツでスタイルが良いから胸の部分がはちきれんばかりになっているのだが、どういうわけか物凄く似合っている。

そう言ったら、煌月は何時嬉しそうに頭を下げていた。

秘書官か何かのように、煌月は俺の仕事をサポート……どころか、俺の仕事の九割九分をこなしてしまう。

何度か「仕事をやらせてくれ」と言ったが、煌月は絶対に譲らなかった。そうならなくていいぜ？　と言っても、兎に角譲らないモノは譲らない。

煌月は俺にはとても従順だが、特定のことに關してはとても意固地になる。こうなると、もう鋼の意思どころか金剛石ダイヤモンドの意思だ。

今日も、なけなしのプライドのために、大分少ない仕事に精を出しているときだった。

「お兄ちゃん、失礼します」

ドアがスライドし、漆黒のドレスと輝く純白の肌を持つ美少女が入って来た。

最高位神獣“天狐”の唯一の生き残りにして、特別中の特別な存在。

生やしている尻尾一本分が、並みの天狐一匹分の力を持っている…
：そして輪廻自身には、並みの天狐の数十匹分の力があるという、
とんでもない存在にして、俺の唯一無二の妹。

「輪廻？　どうしたのですか、刹那様は執務中ですよ」

声をかける煌月に、輪廻はクスリと笑いかけた。

「少し話があるの。煌月、悪いけど手間は取らせないわ。お兄ちゃんに迷惑をかけるなんてこと、私には死んでもできない。それくらい、貴女も知っているでしょう？」

「そうですね。言ってみただけです」

煌月は棚からカップを取り出し、ティーポットで紅茶を淹れ出した。
アッサムの香りが、室内を満たしていく。

「……お兄ちゃぁん……」

「うおっ」

気が付くと、目の前に輪廻がいた。瞳を潤ませ、頬を朱に染め、俺の胸に抱きついてくる。

九本の尻尾がシュルシュルと動き、優しく俺の身体を包み込んだ。

輪廻が言っていた。「私の尻尾には意思がある。そして尻尾もまた、たまらなくお兄ちゃんを愛し、求め、お兄ちゃんの敵を殺したがつている」と。

尻尾は、俺の身体のあちこちをそのまますりすりしてきた。此方も手をあて、ふさふさの尻尾を撫でてやる。

滑らかで、柔らかくて、暖かくて、最高級の毛皮など目では無いくらいに気持ちいい。

「あっ……んっ……」

嬉しそうに目を細め、身体をくねらせる輪廻。子犬か何かのように、拙くとも甘え続けてくる。

さらさらの黒い髪も撫でてやると、ますます嬉しそうに俺の胸に頭を押し付けた。

何処か甘く、優しい匂いが満ちていく。

そして……身体に、輪廻の凄く柔らかい部分も当たるんだが……此れだけは慣れん。

「輪廻、少し——」

離れてくれ。

そう言おうとした瞬間、背中にさらに柔らかい感触が襲いかかって来た。

うおう、これ、まさか……。

「煌月……？」

「はい、刹那様」

耳元に囁かれる、平淡だが風鈴のような涼しげな声。蒼い稲妻のような、刺激的だが優しい刺激でどこか爽やかな香りが鼻腔をくすぐる。

後頭部に、硬い何かが当たる。同時に、何か絹のように滑らかなものがかった。

……煌月が、俺の後頭部に顔を乗せ、背中から抱きついて来ているようだった。

「刹那様……私は、あまり積極的な方ではありません。ですが……此の想いは色褪せたりしません、決して。」

刹那様が望むのなら、夜白 煌月は、刹那様に隷従する麒麟は……」

途轍もなく大きな胸の感触が、背中をじつくりと刺激してくる。

クールすぎる声色、だが縋りついてくるような儚げさも籠った声色と共に、息が後頭部や耳にかかった。

「ふふ、お兄ちゃん……ドキドキしているの？ だったら、もっと感じてほしいなあ……。お兄ちゃんを癒すためだけにある、この身体を……」

そして視線を下に向ければ、上目遣いで甘えたように豊満で柔らか

な身体を押し付けてくる輪廻が、指先でリズムカルにトントンと俺の胸板を叩いている。

.....。

「……こら」

ペチン、と二人の頭を叩く。

「あ……」

「あうっ」

其の儘二人を離し、後頭部を搔く。

あーあ、まったく。

「輪廻も煌月も……そういうの、急にするなって言っているはずだぜ？」

大体こういうときは、サクか真名^{マナ}、若しくはアキラとか……娘達の誰かが乱入して戦闘になるんだから」

「大丈夫だよ、お兄ちゃん。あいつらは、全員別の場所にいるから」

狐の耳をピクピク動かしながら、輪廻はにっこりと笑って見せた。

出来ない事を探すことの方が難しいのが輪廻、そして煌月だ。

俺なんかよりも、よっぽどスペックが高い上に、二人は絶対俺に嘘はつかない。確かめるまでも無く、本当のことだろう。

……先程言った“戦闘”が、俺には本物の“殺し合い”にしか見えない事は、もう慣れたが。

兎に角俺の家族はみんながみんな、俺のことになると険悪になるから……もう諦めている。

いや、止められない俺の無力さもあるのだが。

「其れで、話って？」

煌月が持ってきてくれたティーカップに口を付けながら、俺は輪廻を見つめた。

「あ、うん」

小首を傾げ、相変わらずニコニコ笑っている輪廻は、ぴよんとソファに飛び乗ると、妖艶な仕草で自らのカップに口を付けた。

「お兄ちゃん、この前創造神に仕事頼まれたでしょ？」
幼女

そして耳に届く、先ほどとは打って変わって冷たい声。
……これは、結構キている時の声だな。
俺は苦笑しつつ、首肯した。

「一応俺は神だ。神の責務は果たさねばならない。なら、“世界”の管理は当然のことだろう」

その“当然のこと”とやらが、輪廻たちの気遣いのせいで殆ど無いのだが……という言葉は、無論、心の中に留めておく。

「それに、創造神殿も御困りの様子だったからな」

「…………ツチ……」

「……」

豹変、まさにそうだろう。いや、輪廻の場合は“狐変”か？ など
という莫迦げた考えが頭によぎるが、直ぐにかき消す。

飲み干したカップをぞんざいにテーブルに置き、ドレスから見える
純白の煽情的な足を組んだ輪廻は、苦虫を一〇〇匹噛み潰したよう
な顔をしながら俯いていた。

……隠してるつもりかもしれないが、結構見えてるぞ、それ。

「―――殺―――塵芥^{ちんがい}が―――死―――必ず……」

ボソボソと小声で呟いていた輪廻は、再び顔を上げた。そこにあったのは、まさに花のような笑顔だった。

「お兄ちゃん、その仕事……私たちが代わっても、いいかな？」

「え？」

てっきり創造神殿に報復する許可を、何て言いだすと思っていた俺にとって、その言葉は完全に想定外だった。

「代わるって……“世界”の管理権を、輪廻に移すってことか？」

「そう」

「それは……」

出来ない話ではない。何しろ、目の前にいる我が妹は最高位神獣“天狐”だ。神力は、俺の数兆倍、いや、もっとあるだろう。

彼女なら、創造神殿の創造した法則を捻じ曲げるくらいは鼻唄を歌いながらでもできるだろうことは確実だ。

人間に渡すならいざ知らず、輪廻ならば可能だろう、いや、可能で

ある。

「そんなもの受け取って、どうするつもりだ？」

「当然、お兄ちゃんにゆっくり休んでいてもらって、私が管理をするんだよ」

今にもショッピングに行くような気軽さで、事も無げに言い出す輪廻。

仮に管理権を委譲されたからといって、あくまで神ではない輪廻にとっては其れなりの負担になるはずだ。

だが、何しろ輪廻は創造神殿を「幼女」呼ばわりする二人のうちの一人（ちなみに残りは煌月）だし、上級神など全員瞬殺できる実力を持っている。

それでいて、まだ彼女の“進化”は止まるところを知らないそうだから、もう凄まじいの一言だ。

「いいのか？」

「お兄ちゃんを疲れさせるなんて、絶対に許さない」

笑顔。だが、有無を言わせぬ口調だった。

勿論俺が頑なに拒否すれば、輪廻は折れるだろう。自ら俺の奴隷を公言している輪廻は口先だけではなく、俺に逆らうことは全くいっていいほど無い。

だが……考えてみれば、拒む理由も無いだろう。

「煌月は？」

「私は刹那様の御意志に従いますが、敢えて言わせて頂くのであれば、輪廻に賛成です」

いつも通り淡々という煌月の表情は、普段通りの無表情だった。

「あと、お兄ちゃん。場合によっては煌月の力も借りたいの」

「おう、いいぞ」

「……輪廻、私には刹那様の——」

「大丈夫、千雨や夕映にでも任せておけばいいよ。どうせ、あの二人は暇だろうし」

「……わかりました」

微かに頷いた煌月の反応を見て、輪廻は満足げに頷いた。
そして、俺に視線を向ける。

「有難う、お兄ちゃん。忘れないでね？ 夜白 輪廻はお兄ちゃんの妹で奴隷。お兄ちゃんに全てを捧げ、全てを護り、全てを叶えるの。」

お兄ちゃんはゆっくり休んでいてね？ 何かあったらすぐに連絡するし、日に一度は戻るよ。私にとって、お兄ちゃんがいらない場所に何の価値も無いんだから」

そこまでいって俺の足元に跪いた後、輪廻はフツと消えていった。

「……煌月」

「はい、刹那様」

「……大丈夫かな、輪廻」

「?……何にとつての、大丈夫でしょうか？」

その問いに、俺は答えることができなかった。

2 刹那side 麒麟と妹の願いは（後書き）

此処までプロローグ的な話。次回は娘達のお話です。

御意見御感想宜しくお願いします。

3 硯璃side 娘達の指針はまるで問題なし(前書き)

キャラ紹介は、そのうちまとめやります。まだ全キャラ出せるわけではありませんので、登場次第追記していく形でやりたいと思います。

3 硯璃side 娘達の指針はまるで問題なし

わたくし 私たち ドクターズ “娘達”は、全員管轄や仕事が異なっています。

御父様の御創りになった神工生命体という共通点はあっても、日に
そうそう顔を合わせることもありません。

ましてや、全員が一同に会する場など、そうそう滅多にある事では
ないのです。

御父様の集合命令がかかった時を除けば、緊急事態や特別な行事く
らいでしか逢うことはありません。

其れは同時に、御父様に会うこともあまりない、ということですよ。

しかし、私たちは御父様の手によって、御父様の補佐のために創ら
れた存在だというのが私たちの誇りです。存在意義の前には、不平
不満などあるはずありませんわ。

勿論中には、そんなことはお構いなしに御父様に構ってほしがる愚
妹もいますが……困ったものです。何回ぐちゃぐちゃになるまで殺
し尽しても、しぶとく這い上がってくるのですから。

そんなどうでもよい話は一先ず置きましょう。

大会議室では、私服姿の姉妹が全員揃って、次女の穹斐そらいの説明を聞
いています。

夜白やしろ 穹斐そらい。白いローブを着て、純白のショートヘアと白い肌を持
ち、両目を純白の包帯で覆っている……頭から爪先まで兎に角白ず
くめの愚妹です。

彼女は何時も抱えている分厚い本を小脇に挟みながら、よく通る鈴
のような声で事の説明をしています。

ドールズ

娘達全二八人は、全員全神経を集中させ、聞き入っています。

当然でしょう。私たちにとって、御父様の代わりを務めるなど至上の榮譽。感涙に咽び泣いて当然の反応なのですから。

容姿も服装も、性別以外はバラバラ……下は一〇歳くらいから、上は二〇歳前後の女たちは、徐々に興奮して来たように顔を赤らめています。

今にも両手を天に広げ、御父様を讃える賛美歌でも歌いだしそうな歓喜の熱気。

「……という風に、まずは父さんに御許しを頂いた後……その世界に、まずは一つの国を創り上げます。

其の儘“世界”を統一するのも悪くはないのですが、神界が文句を言ってきたらウザったいので、まずはその国を大国へと押し上げられます。

そしてそのまま——」

包帯のせいで、穹斐の目を窺い知ることはできません。しかし、三日月形に歪んだ口を見れば、彼女の心中が理解できます。

私と比べれば、かなり“常識人”の部類に入るのが穹斐です。彼女は温和で、人間や妖怪・亜人などの御父様以外の存在にも興味を持っている、唯一の娘達ドールズと言っても過言ではないでしょう。

しかし、常識人だろうが結局のところは、彼女も私と……私たちと

同じ穴の貉にすぎません。御父様に関するのなら、一切自重はしません。

無論、私も。愚妹達も。

御父様の御役に立ち、御父様の敵すべてを排除するのが、私たちの存在意義であり……愛と忠義の形なのですから。

「——素晴らしい」

ふと上がった声。何気なしに顔を上げて、発生源を見つめました。それは——つい先ほど説明を終えた、穹斐当人でした。

「御父様の御持ちになる“可能性”が、再び増えました……。即ち！ “世界”の神となり君臨する“可能性”です！！」

頬を朱に染め、唾を飛ばさんばかりに演説か何かのように叫ぶ穹斐を見て、全員「またか」と言いたそうな顔になりました。……私を含めて。

穹斐は、“可能性”に執着します。御父様の可能性は勿論、人間の可能性からバクテリアの可能性まで、あらゆる可能性を求め続けている……端的に言うと、変人です。

おまけに、普段は物腰が柔らかで理性的なくせして、一度感情が高ぶると、演説する独裁者がかわいく見えるくらいに喋りまくり、叫びまくるという悪癖があるのです。

……本当、欠点だらけの、御父様に仕える資格もない愚妹ですわ。
結局、御父様に仕えるにふさわしい娘は私のみということは当然の
帰結です。

「それでさあ……概要は……わかったんだけど……結局……誰が何をすれば……いいんだい？」

そんな中、眠気を誘うような……謡うような声が響きました。
視線を向けると、其処には頬杖をついてクッキーを齧っている、綺麗というよりかは寧ろ不気味なほど肌が白い女がいました。

夜白やしろう 骸亜がいあ。三女。毛先だけ白い黒髪をポニーテールにしている、前髪で目は隠れているが、朱色の瞳を持つ女。瞳は、まるで腐った柘榴ざくろを彷彿とさせます。

兎に角不気味で、兎に角顔色が悪い……如何考えても、御父様の娘を名乗るに相応しくない愚妹です。

それでいて彼女は、姉妹の中でも指折りのサディストで、御父様以外の存在を束縛して操るのが大好きという超弩級の変態です。

……私ですか？ 私にそんな性癖はありませんわ。唯、モノを跪かせて平伏させるのが好きだけです。

「肯定です。三女の意見通り、我々は如何様に行動すべきでしょうか？ 流石に姉妹全員が新設“世界”に乗り込むわけにはいきません」

「是認です。三女の発言通り、我々はどのように動くべきでしょうか？ やはり姉妹全員が新設“世界”に送られるべきではありませんん」

異口同音に応えたのは、六女の夜白やしろう 在唯あゆいと七女の夜白やしろう 無全むぜん。此の二人は双子の姉妹で、小柄で白髪碧眼、ロングの髪……在唯は右頬に、無全は左頬に黒い十字架クロスの刺青がある事以外は瓜二つです。

「ならば私が……」

「莫迦を言ってはいけない。君に父上の代理と言う大任が務まるものか。此処はボクが——」

「寢言を言うなよ、此処は私が……」

言い合いが始まり、私は小さくため息をつきました。喧しい。此れが、此れが御父様の娘として、品位ある行動なわけがありませんわ。

「……“默殺強制”ダマレ」

呟く。其れだけで、喧騒が収まりました。愚妹共は、私の命令に素直に従うような器ではありません。私の“能力”で、強制的に黙らしているだけです。

「まず、輪廻さんが行くことは確実です。其れに、何も常駐するわけでもないでしょう。取り敢えず、私は確定として……何か文句は？」

私は愚妹たちの中では、一番能力が高いことが自慢です。何しろ御父様に何十回もアップグレードをされ、全姉妹を統括できるだけの力を必要とされたのですから。

そう、私は最初に創られた“娘達”……御父様の愛情を、最も長く受け続けている者、そして、最も必要とされ、愛された者なのです。

「……………」

反抗心が高い愚妹共も、私の前では跪くしかない存在です。

「……それでは、私も」

私が能力を解除した途端、スツと手が上がりました。全員が、其方を注視します。

「水霞……」

夜白^{やしろう} 水霞^{すいか}。ほんの数週間前に誕生したばかりの二八女。
碧い髪をツインテールにし、青緑色^{シアン}の目を持つ小柄な少女で、私も
まだ、上手く人格を把握しきれていない。

「まさか……。君はまだ……。父さんの教育を受けている……。最中だ。
仕事に……。向かわすのは……。早すぎる……。」

骸亜がそう言うと、殆どの者が頷きました。

当然の反応です。私たちは皆、最初の二、三年は御父様直々の教育
を受けて、色々なことを教わるようになっていきます。

無論、誕生時から知識としては知っていますが、それと御父様の口
から直接聞くのはわけがちがうのです。

「わかっています。ですけど、別に水霞一人で行くわけじゃあない
のでしょうか？ それに、“世界”管理を間近で見るとは、この先
私が仕事についた時に大きな経験となると思うのです」

しっかりとした口調で淡々と言う水霞の言うことも一理あるので、
私は黙り込みました。

私は御父様から、愚妹らの監督も任されています。本音はこんな小
娘を連れていたくありませんし、必要だとも思っていないせん。

ですが、御父様の望みや命令の前には、私の意思や考えなど……。埃
のような、戯^{タラ}けた存在にすぎません。

「……そうすわね。わかりました。では、まず私・穹斐・骸亜と……水霞で行くことにしましょう。それからは、ローテーションや場合によって、決めていくことにします」

パンパンと、両手を二回叩きました。いつも通りの、会議終了の合図です。

3 硯璃side 娘達の指針はまるで問題なし(後書き)

娘達側から一先ず行く面子が決定しました。

次回は原作キャラ登場、真名視点予定です。

御意見御感想宜しくお願いします。

4 真名side 依頼というか一触即発(前書き)

まだまだ物語開始の序盤みたいな話が続きます。
でも次話くらいからは、管理する“世界”に行ける……かもしれない
せん。

4 真名side 依頼というか一触即発

「龍宮^{たつみや} 真名様^{まな}」

扉が開き、軍服風のコスチュームを着込んだ少女が入って来た。
“娘達^{ドーターズ}”の縹色^{はなだいろう}のコスチュームとそっくりな、しかし萌葱色^{もえぎいろ}の服を
きつちりと着こなし、詰襟までしている。

“恋風莉香^{レブリカ}”と呼ばれる、“娘達^{ドーターズ}”の四女、夜白^{やしろう} 魅柚^{みゆず}さんが創造・
使役・監督する神造人間^{ホムンクルス}だ。五〇人ほどいて、もっぱら召使という
か給仕のような役割を持っている。
いざとなれば、兵士にもなる万能給仕だ。

「ああ」

起きたばかりで頭が働かないが、私は何とか返事をした。
ついでに言うと、“恋風莉香^{レブリカ}”——ちなみに彼女の名前はドロ
シーという——は、「神が造った」という意味での神造人間^{ホムンクルス}
ではなく、「神力で造られた」という意味だ。

私、龍宮 真名は元半魔人^{ハーフ}……しかし、今は半神半魔人という妙な
存在になっている。まあ、妙な存在と言う点ではサクとどこいど
っこいだが。

全ては今からずっと昔……戦場で倒れていたところを、あの人……
刹那さんに助けられ、あの人^{バクティオ}の義理の娘になったことから始まった。
あの人と仮契約^{バクティオ}したことで、私は半分神となり、何時の間^{バクティオ}にやら不

老不死の仲間入りをしてしまった、というわけだ。
今では神格も上がり、ほぼ神と言っても良い身体になってしまっている。

人間から、“世界”から切り離され、あらゆる“世界”からの脱却。そして、刹那さんと共に“世界”を管理する側に回ってしまった……いや、別に後悔も何もない。幸せ絶頂期だ。
まあ、管理だ何だ言うが、結局やる事もあまりないのだが。

あの人、刹那さんと共にいられるのが嬉しくもあり、悲しくもある。私やサクがあの人娘なのにも関わらず、敢えて夜白の姓を名乗らないのも、あの人庇護下にあるだけじゃない、あの人を護れる立場になりたいと思っているからだ。

硯璃は、よく怒っていたな。

「神聖である御父様の姓を名乗らないのは、忠義心が足りない証ですわ」とか言われた。

流石にその一言にはカチンときて、宮殿一つを消滅させるくらいの喧嘩になったのは良い思い出だ。

……良い思い出だ。あの後刹那さんに怒られ、輪廻さんに吊るし上げられただけさ。

「ちょっと待ってくれドロシー、服を着る」

下着のまま寝ていたのを思い出し、急いで服を着た。ついでに、枕元に置いてある銃を取り、軽くチェックする。

……私たちは刹那さんを愛し、忠義を誓っている点では変わらないけど、内部対立は酷いからね。こんなものを用意しなければ、好戦

的な連中が襲いかかって来た時に対処できない。恋敵ライバルを減らすためなら、手段を選ばない奴が多すぎるからね。まったく、スマートさに欠ける。

え？ 私かい？ 私に寝込みを襲う趣味はないさ。殺るなら白昼堂々、遠距離狙撃で仕留める。

まあ、此処の連中はみんな一筋縄ではいかない奴らばかりだから、頭をブチ抜かれた程度じゃあ蚊の一刺しにもならないけどね。

「お待たせ、朝食かい？」

「それもありますが……夜白やしろ 硯璃すずり様がお呼びです」

刹那さんは、週に一度は家族皆で食事をする日を決めている。……だが、それ以外は皆住んでいる場所もバラバラなうえ、生活リズムもバラバラ、おまけに仲が険悪だ。例外もあるが、皆基本的に仲が悪い。

目が合えば罵り合いが当たり前。大体は自分がいかに刹那さんに愛されているかという演説に始まり、次に互いの欠点おとしを貶め合い、最終的には手や足が出る。

互いに擦れ違い合えば、直後に双方の身体の一部が吹き飛んでいる。他にも触れ合いという名の殺し合いなど、あげるとキリがない。勿論、そうそう毎日起こるわけでもないけど、定期的に起こるのさ。刹那さんの前だと、皆仲良くするんだけどね。

私みたいに、誰にでも親切にできる博愛の精神を持ってほしいモノ

だよ。

話が逸れたが、まあ兎も角そんな理由で、普段は皆食事は自室で勝手に摂る事が多い。自炊している者もいれば、“恋風莉香”^{レブリカ}たちで作ってもらう者もいる。

ちなみに私は前者だが、朝食だけは別だ。朝には弱いから、ついつい手を抜いてしまいがちになるからね。

もつとも、私を含めて自炊している者の方が圧倒的に多い。理由？勿論刹那さんにアピールするためだよ。料理ができるというのはかなり大きなアドヴァンテージだ。

……もつとも、我が家族で一番料理が上手いのは刹那さんなのだがね。

「御機嫌よう、真名。早速ですが、“死亡強制”^{シネ}と言われるのと“消滅強制”^{キエロ}と言われるのでは、どちらが良いですか？」

煙管^{キセル}を咥え、紫煙を吐いている硯璃は開口一番こう言ってきた。別にいつも通りのやり取りなので、此方もいつも通りに肩をすくめて首を振る。

「どちらも遠慮させてもらおう。私とて、貴女の『世界覇者』^{レオニダス}のは

対抗できないからね」

硯璃は“娘達”^{ドクターズ}の中でも支配と統括を司っている。彼女は言葉一つで、ありとあらゆる存在を跪かせ……従わせることが可能だ。それが、彼女の能力『世界覇者』^{レオニダス}。正確には、万物の存在意義を指定できる能力だと聞いている。

つまり、彼女に死ぬことが存在意義だと指定されれば、私は死ぬしかない。

彼女は刹那さんが最初に手掛けた神工生命体で、その分試作品^{プロトタイプ}という側面が強い。しかし、幾重にも渡ってバージョンアップを繰り返しているから、その実力は私でも対等に戦えるかすら妖しい。経験ならこちらが上だが、スペックは圧倒的に向こうが上だ。つまり、望んで戦い合いたい相手ではない、ということだね。

「そうですか。……早速ですけど、仕事の依頼ですわ」

「ふむ」

私やサクは、特定の仕事についていない。所謂ピンチヒッターで、頼まれたらその仕事をやる、というスタンスをとっている。敢えて言うとな、普段の仕事は自己練磨だな。

だから、余程理不尽な仕事でもなければ請け負うことにしているが……。

「私だけか？ フリーなのはサクやアキラ、千雨たちも同じだろう」

ちなみに“サク”というのは私の義理の姉妹……つまり私同様、刹那さんの義理の娘である桜咲さくらさき 刹那せつなのことだ。名前が刹那さんとかぶっているの、家族の中ではサクと呼ばれている。

「説明が必要ですか？ 一人で“世界”は滅ぼせる貴女方を真もめて投入するような仕事など、そうそうあるものではありませんわ。仮にあつたとすれば、貴女たちに頼まず私自らが行きます」

「後半は兎も角、前半は納得だね」

「御父様の義理の娘や弟子という理由だけで、優しくしてもらっている貴女方に文句は言わせませんわ。

暇で暇で仕方が無いタダ飯喰らいの貴女方と違い、私は日夜御父様のために働き続けているのです。御父様のために、御父様のためだけに」

……くっ。

悔しいが、仕事量は向こうが多いのも事実だ。癪だが、反論の余地がない。

——仕方がないだろう、神工生命体である娘達きみたちと違い、私たちは世界の管理権を持たない半神人なのだから……。

そんな反論が頭によぎるが、言っても「中途半端な役立たず」扱い

を受けるだけだ。

硯璃は、自分が生まれるずっと前から刹那さんの義理の娘だった私やサク、弟子だったアキラ・千雨・夕映に嫉妬の感情を抱いていることくらいわかっているさ。

……勝者の余裕、というやつがあるから、私は何とも感じないけどね。

「……フッ……」

「……………相変わらず、人を見下す顔が御得意ですこと」

「鏡を持ってきてあげようか？」

ピクピクと片眉を上げている硯璃に微笑みかける。私は優しいからね、気遣いのできる女なのさ。

「……まあいいでしょう。これから私は、御父様………のための仕事で忙しくなります。其処で、貴女に愚妹達の指揮権を全権一時お渡したいのです」

煙管キセルを思い切り吸い込んだ硯璃の口から放たれたのは、予想外の一
言だった。

ドールズ
“娘達”の指揮は硯璃が執る。彼女が執れないのなら、次は次女の穹斐そらいが執る事と決められているはずだ。

「穹斐も仕事なのか？」

「ええ。正確には骸亜がいあと水霞すいかもです。残る愚妹達も、場合によっては呼ぶこともあり得ます。

なので貴女は、此処の“世界”にいる愚妹達を指揮してくれば結構です」

「骸亜までも、か……。だったら次は魅柚……。そして黄染きぞめ……。となつていくのが順当だろうが」

「魅柚と黄染も呼ぶ可能性が高いですね。直ぐというわけではないにしろ……。

おまけに魅柚は気弱で、黄染は猜疑心の塊のような愚妹です。指揮には向いていない。双子の方がよほど指揮能力がありますわ」

「……先程から呼ぶとか何とか言っているが……」

「ええ」

其処まで言って、硯璃は清楚に微笑んだ。
相変わらず、（見た目は）大和撫子だ。

「私たちで、“世界”を管理することになりました」

4 真名side 依頼というか一触即発（後書き）

神工生命体と神造人間は少し違います。

前者は神が造った生命体、後者は神力で形成された人型生命体のことです。

ランクとしては前者の方が上で、より高い知能や能力を有します。後者の方は、単純な命令に従うだけのロボットのようなものです。

御意見御感想宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0011y/>

魔法先生ネギま！～狐と兄の燈し語・改～

2011年10月31日16時12分発行